京都で唯一の被爆地となる

さて、昭和二十年一月十六日。私の持論を裏切って、東山の私の家の近くに焼夷弾が落された。京都には焼夷弾は落ちないと言って回っていた訳ではなかったが、私は少なからず悲観した。だが、あの落し方をみると、ほんとうに京都を焼き払うつもりではなかったとしか思えなかった。工場も何もない東山の中腹に落ちたわけだから、おかしいとは思ったが現実に落ちたことには間違いはない。死傷者を合せば、百名近く、十何軒かの家も焼けた。ちょうど私の家をまたいだように私の家は飛びこして横の家へ命中した。

あの時のことを思い起してみると、空襲のあった少し前にかなりの地震があった。家内は義母の病気で里へ帰っているし、私は、今、市会議員となっているが当時書生であった中村徳三君と二人で将棋を指していた。「きつい地震やなあ」と思っていたら、しばらくして、またガーという音がしたと思ったら。ガラスがバリバリと割れた。また地震だと思って表へ飛び出した。というのは警戒警報も出ていなかったので、てっきり、さきの地震のゆりかえしだと思い込んだわけだ。外に出てみると、もう西の方には火が出ていた。バケツを持ち出したものの、もうどうにもならない。町内会長として咄嗟に考えたことは、狭い道で、もたもたバケツリレーなどしていると却って消防署の消火活動の邪魔になる。むしろ、危険だからとバケツリレーをやめさせて消火は消防隊に任せた。死人や怪我人の処置をする方が我々の急務だと専ら救急に当った。

先般、二十周忌の法要を町内で営んだのだが、当夜のことを想い、感慨無量だった。ある家では二階に寝ていた兄弟が死んで階下の両親は助かっている。また反対に隣の家では両親が死んで子供が残ったという悲惨な家があった。

踏絵

町内会長としての私は随分、軍や警察に対して、やり方が気に入らないと言いたい事を言っていたが、今、思い出してもおかしくなることがある。その一つは、我々町内会長が呼ばれて区役所に集ったことがある。時の区長が、「今度の戦争で、どうも国民の敵愾心が足りない。もっと敵対心をあおるために、アメリカや英国の国旗を踏めという上部からの指令を伝えた。学校の入口などに敵国の国旗を置くから、みんなで踏むべしということである。私はあんまり馬鹿らしいもので黙って聞いていられなくなり、思わず立上った。

「敵愾心があって、その敵愾心のほとばしりから、ついに敵国旗を踏みつけるというのならわかる。国旗を踏みにじることによって敵愾心を起そうというのは本末顚倒も甚だしい。一体、今度の戦争で敵愾心が足りないと言うのは、戦争の目的がはっきりしないからだ。日露戦争の時には、まず国民がロシヤのやり方に我慢がならないという国民感情が燃え上り、そこで皆一番に立ち上ってロシヤと戦おうという戦意が高揚した。当時の政府はむしろ、はやる国民の興奮を抑えるようにしていて、国民